九州北部豪雨を経験して

第３方面隊　第２５分団
梅本　喜夫

「消防団で出動せなんぞ」と父の言葉で起床したのは午前六時過ぎでした。

こんな土砂降りの中、火事かと思ったが次の言葉で耳を疑いました。

「白川が氾濫するぞ」まさかと思い高台にある私の家から白川の様子を見ると、今にも民家を飲み込まんばかりに濁流が押し寄せているではありませんか。

これが、平成二十四年七月十二日に発生した九州北部豪雨の私の目に飛び込んできた最初の状況でした。

幼いころから、この地に住む私は、何度か白川の洪水を見てきましたが、ここまで増水した白川を見たのは初めてでした。

身が竦む思いでしたが、すぐハッピに着替え、カッパをはおり、川沿いの民家へ避難誘導のために向かいました。

そこには消防団の積載車がすでに到着しており、車載のスピーカーで避難誘導を実施していましたが、雨の音がひどく、なかなか住民には伝わらない状況でした。

このままでは被害が大きくなると感じた私は、一軒一軒、ドアを叩き避難を呼びかけて回りましたが、「二階があるけん大丈夫。ここまではこんど」と何度か洪水を経験されている住民は危機感がありませんでした。

この時、自分が白川の危険な状況を住民へうまく伝えることが出来ないことと、住民が自分の指示に従ってくれないことに対して人間の非力さと無力さを感じさせられた瞬間でした。

呼びかけて一時間程が経過し、腰付近まで増水したとき、ようやく住民の方は危機感を感じ避難を始めました。少しでも住民の方の役に立ちたいと思い、子供や高齢者など自力避難困難と思われる方の避難補助を最優先に無我夢中で行いました。

避難誘導の活動の中で特に印象に残った出来事がありました。

あるアパートから子ども三人と、その母そして、お母さんの腕の中には、まだ生後一週間の乳児が抱かれているではありませんか。

私にも同じ年頃の子供いることから重なる部分があり、「この子たちを避難所に連れて行っては、オムツやミルクもない、子供もお母さんも、きっと困るに違いない」そう判断した私は避難所ではなく、私の自宅に避難してもらいました。

災害後、そのお母さんと子供達の元気な姿を見たときは、人の役にたててよかったと感じ、また、消防団に入ってよかったなと思えた瞬間でもありました。

夕方になり白川の水は引き、翌日から復旧作業が始まりました。

被害は予想以上に酷く、夏の時期も重なり思うように復旧作業は進みませんでしたが、各方面からの消防団の応援、ボランティアの方のおかげで徐々に元の町並みを取り戻して

いきました。
　九州北部豪雨から、今年で二年が経ち、災害のことを振り返ることが最近あります。
　それは、もっと早く非難誘導をすることができなかったのかと・・・
　近年は情報社会と言われているとおり、テレビやラジオ等で情報収集することは大切な手段だと思います。
　しかし、私はもっと大切なことがあると最近考え始めました。
　それは、地域住民の方とのコミュニケーションです。
　恐らくあの災害の時、私に「避難してください」と言われた方は私の事を初めて見たのだと思います。
　もし、これが顔見知りであれば、私の言い方や表情で危機感を感じ避難してくれていたかもしれません。
　古風な考え方かもしれませんが、近年は人と人との繋がり、近所付き合い、そういったものが失われつつあると思います。
　今後は地域や町内で行われる、行事や催し事に積極的に参加し、地域住民の方とひとりでも多く顔見知りとなり、コミュニケーションをとりながら、信頼関係を築き今後の消防団活動に生かしてかしていきたいと思います。
　地域住民の生命、身体、財産を守るために・・・